
バカと新撰組と召喚獣

疾風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと新撰組と召喚獣

【Nコード】

N4281Z

【作者名】

疾風

【あらすじ】

真田涼佐。彼は幼い頃より、新撰組に入り任務をこなしてきた。小・中とちゃんと学校に行った。高1の時いろいろあって、高2の春、文月学園に転校することになった。今、明久たちとの学園生活が始まる。

はじめに（必ずお読みください）

はじめまして、疾風です。この小説が初投稿です。なので、文章がおかしかったり漢字が間違っていたりすると思います。そのへんは温かく、見守ってくれるとうれしいです。できるだけ間違えないよう気を付けます。また、初めに設定がわからないと話が全くのみこめないのでちゃんと読んで下さい。では各設定の説明に入ります。

） 主人公設定 ）

名前

さなだ りょうすけ
真田涼佐

真田家十四代目当主であり、新撰組十一番隊長。

性格・見た目

基本優しく、武士道を手本としている。見た目はかなりカッコいい。

得意科目

数学（高橋女史以上）

苦手科目

英語（明久以下）

召喚獣装備

新撰組の服装、刀、

） 新撰組について ）

警察と似たような役割。任務内容は、各担当地域の巡回、反政府軍の鎮圧など様々。十一個の隊から形成されており、隊長は近藤勇、副隊長は土方歳三、一番隊隊長は沖田総司。

） 反政府軍について ）

高知に拠点をおき、今の政府に不安を覚え政府を倒そうとしている。代表は坂本竜馬。戦国時代で活躍した、大名たちの子孫が中心。九州にて同志を集めている。時々新撰組と戦闘を行う。

第一問　く始まりく

俺は真田涼佐。名前でも分かるように、真田家十四代目当主だ。父と母はいない。反政府軍に殺されたのだ。父は新撰組に所属していたため、俺もその跡を継いでいる。新撰組だといっても学校に行かない訳ではない。小・中とちゃんと学校に行った。高校一年もちゃんと学校に行った。・・・いろいろあったが。そして、今高2の春。俺はとある事情で、この文月学園に転校することになった。もともとこの辺は俺たち十一番隊の担当区域で、よく巡回に来ているのでそこまで新鮮味はなかった。というか、結構この辺では事件がよく起こるので基本ここで任務をする事が多いから、この辺はよく知っている。また、文月学園のこともよく知っている。なぜかという、ここの高橋女史（先生）から「数学の問題を作ってほしい」と頼まれてしまい、毎日問題を作って持って行っているからだ。どうやら俺が作った問題を生徒の宿題にしているようだ。・・・そんなことしていいのか？と尋ねた所、どうやらテストの問題じゃなければ、だれが作ってもいいらしい。結構自由な学園なんだなーと思った。他にも試験召喚戦争など面白そうなシステムがあるらしい。明日がとても楽しみだ。おっと一次関数の問題も作らなきゃな。

第一問 く始まりく（後書き）

初めて本文を書きました。結構大変ですね。これから頑張っていきたいと思います！

第二問 く出会い

転校初日だというのに遅刻してしまった。理由は簡単。新撰組の仕事があつたからだ。高橋先生には「遅れてもいいですよ」と言われているのだが遅れるのは悪いと思つたので、急いで学校に向かう。校門の前についたときは、当然のことだがもう生徒は誰もいなく先生が一人立っているだけだつた。あの先生は確か……

「おはようございます。西村先生。かつこ 鉄人 かつことじる。」

「……そこまで言うならいつそ鉄人と呼んでくれ。」

「いいんですか！軽い冗談のつもりだつたんですけど。」

本当に軽い冗談だつたのだが……。まあ西村先生と呼ぶことにしよう。

「ほら、この封筒を受け取れ。中に所属クラスが書いてある紙が入つてるぞ。」

「いや、いらぬですよ。どうせクラスは分かつてるんですから。」
そう俺のクラスはもう決まっている。そうFクラスだ。この文月学園では振り分け試験の点数によってAクラスからFクラスに振り分けられる。頭のいい奴はAクラス、悪い奴はFクラス、といった具合だ。しかし俺は振り分け試験当日、重要な任務があつてテストを受けることができなかった。テストを受けなかった場合は、無得点扱いになる。だから俺のクラスはFクラス、そう決まっているのだ。

「まあ一応もらつておけ。そういう決まりだからな。」

西村先生がそう言うのでしかたなく封筒をもらい、自分のクラスへ急ぐ。

「……なんなんだ、このばかデカイ教室は」

と、驚きつつ教室の中を見てみるとそこでは高橋先生がいた。

「これが噂のAクラスか……」

高橋先生にこのクラスのことば聞いていたが、本物を見ると圧倒される。

「皆さん進級おめでとうございます。私はこの二年Aクラスの担任、高橋洋子です。よろしくお願いします。」

高橋先生が自己紹介している。

「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートその他の設備に不備のある人はいますか？」

「……すごい贅沢なクラスだな。冷蔵庫にはお菓子などの食料、エアコンは教室どころか各人に一台。壁には格調高い絵画や観用植物がさりげなく置かれていた。まるで高級ホテルのロビーみたいだ。

「参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身もすべて学園から支給いたします。他にも何か必要なものがあれば遠慮なく何でも申し出……」

ついでに作った問題を渡そうと思ったが長くなりそうなので諦め、Fクラスへ急いで向かう。

Fクラスの前に到着した。これから俺の新たな学園生活が始まるんだなあ。と、思いながらドアに手をかけ、ドアを開けた。すると、見覚えのある顔が二つ目にとびこんできた。

「・・・なんでお前らがいるんだ。翔、瞬。」

「それはこつちのセリフだ！涼佐。なんでお前ほどのやつがFクラスにくるんだよ！絶対Aクラスに入れるだろ！」

「そうですよ！隊長がこの学園に転校してくるのは分かっていますけど、なんでFクラスに配属されたんですか！」

この二人は、俺の隊十一番隊に所属している。先に話してきた方が伊達 翔。伊達家十四代目当主で、新撰組十一番隊副隊長だ。基本銃で戦い、とても頼りになるやつだ。敬語を使っている方が山崎瞬。十一番隊の隊員で、情報専門だ。こいつの情報網はハンパじゃない。知りたい情報は何でも知っている。・・・全くどこから仕入れてくるのやら。まあとにかくこの二人とは親友だ。

「お前ら忘れてんのか！俺はその日任務があっただろうが！」

「ああそうだった、そうだった！そっぴや戦ってたわ。」

「やっと思い出したか。全くちゃんと覚えておけよ！それはそうとしておまえらはどうしてここに居るんだ？」

「あの日沖田さんにたくさん仕事を押し付けられちゃったんですよ。それでぼくも隊長と同じでテストを受けられなかったんですよ。」

「ここぞとばかりに押し付けられたんだ・・・」

「そうか、それは大変だったな。」

「まあ今回はかりは沖田さんに感謝だな。」

「そうですね。」

「どうして沖田さんに感謝するんだ？」

「だってこうして三人同じクラスになれたからさ。」

「そうだな。」

本当に感謝してもいいかもしれない。今度お礼を言っておかなきゃな。と、考えていると二人の男子が話しかけてきた。

「おう翔、瞬知り合いか？」

「ああ、うちの隊の隊長で親友だ」

「そうか、じゃあ自己紹介をさせてもらおう。俺は坂本雄二だ。翔や瞬とは仲良くさせてもらってる。あと、一応このクラスの代表だ。これからよろしくな」

「僕は吉井明久。ぼ「バカな観察処分者だ」ってなんてことを言うんだ雄二！」

「事実だろ。」

「事実でも言っていないことと悪いことがあるよ！」

「いつもこんなかんじなのか？瞬。」

「はい。いつもこんな感じですよ。面白いでしょう？」

「ああ、面白いなこれは。」

と言った後、まだいがみ合っている明久と雄二のもとへ向かう。

「明久、雄二お前からおもしれーな！俺と友達になってくれないか？すると二人ともいがみ合いをやめよう言った。」

「「もちろん（だ）」」

「そうか。じゃあ、俺は真田涼佐。新撰組十一番隊隊長で、真田家十四代目当主だ。涼佐と呼んでくれ。」

「ああ分かった。お、先生が来たぞ。席に着こうぜ。」

雄二の言う通り先生が教室に入ってきたので、俺は翔と瞬の間の席に座った。

ここから俺の学園生活が始まった。

第二問 く出会いく（後書き）

結構短めな感じだったのに、とても時間がかかりました。投稿ペー
スやどのくらいの長さで区切った方がいいのかわかりません。できれ
ばアドバイスをお願いします。感想、意見などお待ちしております。

第三問 〱戦闘準備〱

「えー、おはようございます。二年Fクラス担任の福原慎です。よろしく願います。」

福原先生は薄汚れた黒板に名前を書こうとして、やめた。まじかよ、チヨークすらろくに用意されてないのかよ……。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出てください。」

五十人程度の生徒が所狭しと座っている教室には机などない。あるのは畳と卓袱台と座布団。なんて斬新な設備なんだ。教室に入った時は、瞬や翔が先に目に入ったので設備のことはあまり気にしていなかったが、改めて見るとひどい設備だ。天井には蜘蛛の巣が張っている。

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー。」
誰かが先生に設備の不備を申し出る。

「あー、はい。我慢してください。」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れてます。」

「木工用ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください。」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど。」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう。」

あたりを見渡すと壁にはひび割れや落書きでいっぱいだった。酷いな。ここは廃屋か……。

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください。」
教室全体がかび臭い。きつと床の畳から匂っているのだろう。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね……、廊下側の人から願います。」

福原先生の指名を受け廊下側の生徒のひとりが立ち上がり、名前

を告げる。どこかで見た顔だな・・・

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある。」

どっかで見た顔だと思ったら、姉妹でチンピラに襲われてた所を助けたんだ。独特の言葉遣いだったのでよく覚えている。実は男だったと知った時はおどろいたもんなー。・・・あと、姉の方は結構かわいかったしな。

「-と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

軽やかに微笑みを作り自己紹介を終える木下。

「秀吉さんは男の子ですよ。」

と、瞬が教えてくれる。

「わかつてるつつうの。一度会ったことがあるからな。」

すると、瞬は驚いた様子で、

「会った事あるんですか！ いったいどこで？」

「任務中にチンピラに襲われていたところを助けたんだよ。」

「そうなんですか。じゃあ紹介しなくてもいいですね。ちなみに僕らとは友達ですよ。」

そんな話をしていると、いつの間にか次の生徒が立ち上がった。

「・・・土屋康太。」

なんて口数が少ない奴なんだ。これじゃ何も分からん。しかたないので瞬に聞いてみる。すると、瞬が説明してくれた。

「あの人は、土屋康太さん。情報網の大きさとても広く、情報通です。特に盗撮、盗聴などの技術は非常に高いです。また、いわゆるムツツリスケベというやつなので、明久さん達は「ムツツリー」と呼んでいます。」

「細かい説明をありがとう、瞬。明久達がそう呼んでいるなら俺もそう呼ぶことにしよう。」

それにしても見渡す限り男だらけだな。学年最低クラスともなると女子はほとんどいないのだろうか。

と考えていると次の人が自己紹介を始めた。

「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書き

が苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は・・・」

お。このクラスには珍しい女子だ。

「趣味は吉井明久を殴ることです」

おい！ちよつとまてー！。さつきできたばかりの友達に危険がせまってるぞ！

「はろはろー」

笑顔で明久に手を振っている。手を振られた明久は青ざめている。

「あの人は島田美波さんです。島田さんは本当はBクラス並みの力を持っているのですが、日本語の読み書きがあんまりできないのであんまり成績は良くありません。でも数学は日本語が読めなくてもできる問題が多いのでなかなかの点数が取れています。また、明久さんによく関節技をかけています。」

どうしたら関節技をすることになるんだよ・・・

島田さんの自己紹介が終わり、その後は淡々と自分の名前を告げる作業が続く。次は明久の自己紹介だ。どんな自己紹介をするのやら。明久は一瞬立ち止まり、自己紹介を始めた。

「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に「ダーリン」って呼んで下さいね。」

「「ダーリィーン！！」」

野太い声の大合唱。翔もノリノリで参加していた。

「失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします。」

・・・明久完全にミスったな。次は翔か。どんなふうに話すんだ？

「俺は、伊達翔だ。新撰組十一番隊副隊長をやっている。」

翔がそう言ったとたん、みんながざわめきだした。

「十一番隊ってことは、あこがれの真田涼佐さんがいるんだよなあ！」

「そついうことだよな！」

「俺たちと同じ年齢なのに数々の任務をこなすし、しかも成功率は

99.9%。しかも自分のことより、人のことを優先するし、ほん
とあこがれちゃうよな！」

なんていうかめちゃくちゃ恥ずかしい。それも本気で言ってるみた
いなので余計にだ。

「ちよつと待ってみんな、いったんしずかにしてくれ。これから隊長
のことを話すから。」

翔がそう言うのとみんながしずまった。何か嫌な予感がした。

「……隊長はあそこにいるぞ！」

翔は俺を指さしそういった。

「えっ。」

みんながこちらを見る。

「……なんでそういうこと言うかなあ。翔。」

俺はため息をつきながら翔に向かってそう言う。

「いいだろ涼佐。自己紹介をする手間が省けたんだし。」

「まあいいや。俺の名前は真田涼佐。新撰組十一番隊隊長だ。これ
からよろしくな。」

「……はい！！！！」「」「」

驚くほど爽やかに返事をされたのでびっくりした。すると彼らの中
から一人こちらに向かってきた。

「私は、須川亮と申します。このクラスの異端審問会の会長をして
います。私たち異端審問会は、あなた様を尊敬しております。なに
か御用がありましたら何でも申し付け下さい。」

「あ、ああ。」

なんだこいつらは……。いきなり言われて何が何だかつかめない
ぞ。俺を尊敬してる？なんじゃそりゃ？まあ、とりあえずそんな人
じゃないことを言わなきゃな。

「あんな須川、俺はそんな……。」

「みんな！隊長がお話があるそうだ！」

「おう！」

「何か御用ですか？隊長。」

すぐに須川たちが俺の前でひざまずいた。なんか馬鹿らしくなってきた。

「須川、そういうのはやめてくれないか？頼みごとがあるときはまた呼ぶから。」

「はい！分かりました！いつでも用があるときはお呼びください。」
そう言つとみんな席に戻つていった。ふう、なんて疲れるんだ。まあ慕ってくれるのは悪い気はしないが

「・・・です。よろしくお願いします。」

いつの間にか瞬の自己紹介は終わっていた。あいつは目立つことが嫌いだからな。

その後も、名前だけを言つていくだけの単調な作業が進む。そろそろ終わらないかなあ。と思つてきた時に不意にがらりと教室のドアが開き、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん・・・」

「・・・えっ」

誰かというわけでもなく、教室全体から驚いた声上がる。なんでみんな驚いているんだ？明久は驚いてないようだが・・・。翔に聞いてみるか。

「翔、どうしてみんな驚いているんだ？遅刻なんて見慣れた光景だろ？」

「見慣れてるのはお前だけだつつの・・・。まあいいや、これから自己紹介するみてえだからそつちを先に聞いてからにしようぜ。」

瞬の言つとおり、女子生徒が自己紹介しようとしていたのでそちらに耳を傾ける。

「あの、姫路瑞希といいます。これからよろしくお願いします・・・。」

小柄な身体をさらに縮こめるようにして声を上げる姫路。可憐な容姿は、男だらけのFクラスで異彩を放っている。皆はその容姿を見て驚きの声を上げたのだらう。と俺は思った。ところがそうではな

かった。

「はい！質問です！」

既に自己紹介を終えた男子生徒の一人が高々と右手を挙げる。

「あ、は、はいっ。なんですか？」

登校するなり、いきなり質問が自分に向けられ驚く姫路。後ろでは、明久が姫路をうつとりと眺めていた。

「なんでここにいらっしゃるんですか？」

どういうことだ？姫路はここに居てはいけないのか？すると翔が教えてくれた。

「何が何だかわからない、って顔をしてるな。仕方ねえな、教えてやるよ。姫路はあの外見だから人目を引くだろう？」

「そうだろうな。」

「だが、それよりもすごいのがその成績だ。入学して最初のテストで学年二位を記録し、その後も上位一桁以内に常に名前を残しているほどだ。」

「そんなに頭のいい奴がどうしてこのクラスに居るんだよ？」

「さあな。それが俺も知りたいってわけだ。」

翔も知らないようなので、姫路のほうに耳を傾ける。

「そ、その・・・」

緊張した面持ちで身体を硬くしながら姫路が口を開く。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました・・・」

なんだ、俺たちと同じかよ。試験途中での退席も無得点扱いとなるらしい。そんな姫路の言い分を聞き、クラスの中でもちらほらと言い訳の声上がる。

「そう言えば俺も熱の問題が出たせいでFクラスに。」

「ああ。化学だろ？アレは難しかったな。」

「俺は弟が事故にあったと聞いて実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて。」

「今年一番の大嘘をありがとう」

どうやら俺の想像を超えるバカばかりらしい。

「で、では今年一年よろしくお願いしますっ！」

そんな中逃げるようにして、明久と雄二の隣の空いている卓袱台に着こうとする彼女。明久がまた鶉鳥と姫路を見つめている。

「き、緊張しましたあゝ・・・。」

席に着くや否や、安堵の息を吐いて卓袱台に突っ伏す姫路。さてとちよつと話に行くか。

「あのさ、姫・・・。」

「姫路。」

明久の声にかぶせるように雄二が声をかける。・・・なんか明久がめっちゃ悲しそうな顔をしているんだが。

「は、はいっ何ですか。えーっと・・・。」

あわてて雄二の方を向きスカートの裾を正す姫路。

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む。でこつちにいるのが新撰組トリオだ。」

「・・・おい、いつから俺らはお笑いコンビを組んだんだ。まあいや、俺は真田涼佐だ。よろしく頼む。」

「俺は伊達翔だけ。これからよろしくな。」

「僕は山崎翔です。これからよろしくお願いしますね。」

「あ、姫路です。よろしくお願いします。」

深々と頭を下げる姫路。挨拶も丁寧だし、育ちが良さそうだな。

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる。」

雄二が質問すると明久が口を挟んできた。明久って優しいんだな。

「よ、吉井君!？」

明久の顔を見て驚く姫路。明久がとても悲しそうな顔をしていた。それを見た雄二がフォローしよう・・・

「姫路。明久がブサイクですまん。」

するはずがなかった。なんで俺は雄二が明久のフォローすると思っただ。雄二がそんなするはずがないだろ。

「そ、そんな！目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ……。」
「確かにそうだな。俺が見る限りでは、明久はかっこいい方だと思うぞ雄二。」

「そう言われるとそうかもしれないな。俺の知っているやつにも、明久に興味を持ってている奴がいたような気もするし。」

「え？それは誰……。」

「そ、それってだれですか!？」

明久のセリフが姫路に遮られる。まあ聞きたいことは同じだったようだが。それにしても本当に女子はこういう話好きだよなあ。俺にはようわからん。

「確か、久保……。」

久保、何って言うんだろうな。知りたいってほどじゃないが少し気になるな。

「……利光だったかな」

俺には男の名前にしか聞こえないんだが……。

「隊長、久保利光さんは男ですからね。」

「そうだよな……。」

うん、やっぱり男だよな。

「……。」

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな。」

俺でも男に好かれていていると思ったらおんなじようになると思う。

「安心しろ明久。半分冗談だ。」

「え？残り半分は？」

「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」

「あ、はい。もうすっかり平気です。」

「ねえ雄二！残りの半分は？」

取り合おうとしない雄二に対し、しつこく聞こうとする明久。

「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね。」

教卓をたたいて先生が警告を発してきた。

「ああ、すみま・・・」

バキィツ　バラバラバラ・・・

突然教卓がごみ屑と化した。ひどいな・・・。

「え・・・替えを用意してきます。少し待っていてください。」
「気まずそうにそう告げると、足早に教室を出て行った。」

「あははは・・・」

姫路が明久の隣で苦笑いしている。すると明久が、

「・・・雄二、涼佐達、ちよつといい？」
「と言ってきた。」

「ん？なんだ？」

「どうした明久？」

「ここじゃ話しくいから、廊下で。」

「別に構わんが。」

「別にいいが。」

俺と雄二と翔と瞬は立ち上がって廊下に出る。そして雄二が口火を切った。

「んで、話って？」HR中だけあって廊下に人影はない。

「この教室についてなんだけど・・・」

「Fクラスか。想像以上にひどいもんだな。」

「蜘蛛の巣がそこらじゅうに張っているしな。」

「そうだな、あれ見たときはここが勉強するところか？と思ったぜ。」

「

「お世辞にもきれいとは言い難いですね。」

「みんなもそう思うよね。」

「「もちろんだ」「」

「そこで僕からの提案なんだけど、折角二年生になったんだから「
試召戦争」をやってみない？」

「戦争、だと？」

「うん。しかもAクラス相手に。」

「・・・何が目的だ。」

「いや、あまりにひどい設備だから。」

「……嘘つけ」

「……明久、嘘をつくならもつとまともな嘘がつけねえのか。」
「ぐつ。あー、えーつと、それは、その……。」

明久がためらっているならこつちから言わせてもらいますか。

「……姫路のため、だろ？」

俺がそう言ったとたん明久の背筋が伸びた。単純なやつだ。

「ど、どうしてそれを。」

「俺は相手の思っていることを読み取ることができるんだ。」

「隊長の人間観察力はすごいですよ。どの人が犯罪を犯したかすぐに分ちやうんですから。」

「まあ自分の恋愛のことに対してはものすごい鈍いけどな。」

そんなに俺鈍いかなあ？結構敏感だと思うが。

「べ、別にそんな理由じゃ……。」

「言い訳は必要ないからな。」

明久がまだあがくので、雄二がバツサリと言い切った。

「気にするな。お前に言われるまでもなく、俺自身Aクラス相手に試召戦争をやるうと思っていたところだ。」

「そうだな、俺らも一回やってみたいとおもっていた所だ。」

「そうなの？でもどうして？みんなそこまで勉強してない気がするけど。」

「世の中学力だけがすべてじゃないって、そんな証明を試してみたくてな。」

「俺はいままでやってきたことがどれほど通用するのか知りたいからだ。」

「へー。」

「Aクラスに勝つ作戦は俺と涼佐で考えるところ……おつと先生が戻ってきたぞ。」

雄二の声に促されるまま、俺たち五人は教室に戻った。

「さて自己紹介の続きをお願いします。」

「えー、須川亮です。趣味は・・・」

特に何も起こらず、また淡々とした自己紹介の時間が流れる。

「坂本君、君が自己紹介の最後の一人ですよ。」

先生に呼ばれて雄二がゆっくりと教壇に向かう。坂本君はFクラスのクラス代表でしたよね？」

先生に問われ鷹揚にうなづく雄二。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きに呼んでくれ。」

Fクラスというバカの集まりで比較的頭がよかったというだけの生徒。

「さて、皆に一つ聞きたい。」

そんな生徒がゆっくりと全員の間を見ようように告げる。皆の様子を確認した後、雄二の視線は教室内の各所に移りだす。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

つられて俺らも雄二の視線を追い、それらの備品を順番に眺めて行った。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが・・・」

一呼吸おいて、静かに告げる。

「・・・不満はないか？」

「大ありじゃあつ！！」

二年Fクラス生徒の魂の叫び。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。」

「そつだそつだ！」

「いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する！」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる

！」

堰を切ったかのように次々とあがる不満の声。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

級友たちの反応に満足したのか、地震に満ち溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて、

「FクラスはAクラスに「試験召喚戦争」を仕掛けようと思う。」

Fクラス代表坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

第三問 〱戦闘準備！〱（後書き）

どうも疾風です。今回は長めの文を書いてみました。僕はまだ中学生なので誤字脱字や文章が間違っている所があるかもしれないので、間違いがあったら教えてくれるとうれしいです。感想、ご意見などお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4281z/>

バカと新撰組と召喚獣

2011年12月18日10時46分発行